おおだし　　きょういくきょうざい
大田市ふるさと教育教材

せいすいじ
清水寺

おおだ　　はなし
大田～お話つむぎ

おおもりちょうへん
ー大森町編ー

この本の刊行にあたって

この本は、大田市教育委員会が「ふるさと教育」のための教材として制作したものです。ぜひ、様々なところで読み語りの題材や教科領域の学習教材などとして工夫してご活用ください。

この本の編集は、大田市教育委員会が委託した特定非営利活動法人石見銀山資料館が行いました。

本文中の挿絵は、大田市立大森小学校の児童の皆さんにご協力いただきました。

この本の監修は、長年大田市の市民ミュージカルなどの文化活動にご尽力いただいている脚本家の佐藤万里氏にお願いしました。

この本の編集に際して次の方々からご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

福田芳子様、福田豊様、大田市立大森小学校の皆さん

教育ＰＲＯ「子どものえがお」（市民団体）の皆さん

最後に、この本の刊行にあたっては森脇太一氏のご遺族に多大なるご高配を賜りました。厚く感謝の意を表します。

この本を読む前に

この本には、森脇太一編『大森昔話口碑伝説集』に収録された昔話から四話を選び掲載しました。

編集にあたってはなるべく原本の内容を尊重しましたが、読者が幼児・児童である点を考慮して、漢字にはルビを付し、また難解な言葉や方言などには簡単な解説を加えました。

本文の内容を補うため必要に応じて文末において解説を行いました。

この本は電子書籍です。本文中には文字横の一線、👆マーク、＊印があり、それらをクリックすると、関連するページや用語の説明、また、インターネット上のホームページや音声、動画を見ることができます。クリックしてみてください。

もくじ

この本の刊行にあたって

この本を読む前に

もくじ

一、どぶの主

二、けちなお医者さん

三、清水寺の仏さま

コラム　安原備中守とは？

四、焼いた柿の種から芽は出るか

あとがき

大森町を訪ねて（大森町を紹介する動画）

一、どぶの主

むかしむかしある村に、何十年が間、住職のおらない荒れた寺がありました。

あるとき、ひとりの武士がその村を通りかかって、茶店の主人に、

「あの寺はどういうわけで、あんなに荒れているのか」

とたずねました。茶店の主人が言いますには、

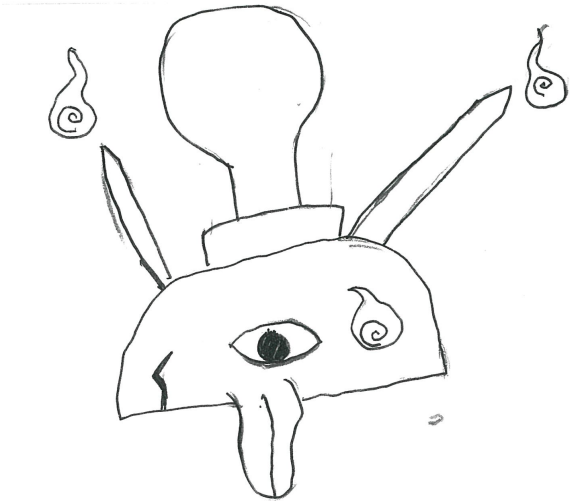
「あの寺には夜な夜な変化＊が出ますので、だれも住む者がおりません。それであのように荒れてしまいました」

「よし、それではわしが寺に泊まって、変化を退治してやろう」

武士がすぐさま立ち上がったのを見て、茶店の主人はあわてました。

「お武家さま、おやめなさいませ。これまでにもそのようにおっしゃって、変化を退治しに行かれた方がおりますが、ひとりとして無事に帰ってこられた方はありません」

けれども武士はよほど腕に自信があるのか、茶店の主人がとめるのをふりきって、寺へ出かけていきました。



本堂へあがってみますと、足のふみ場もないありさまです。

武士はしゅみだん*の前にすわって、じっと様子をうかがっておりました。

真夜中になると、ぞくぞくするような気配がせまってきました。

それなのにどういうわけか、ねむくてたまらないのです。

「これはあやしい。きっと魔物のしわざにちがいない」

と眠気をこらえて、目をみはっておりますと、妖怪変化が次々と姿をあらわしました。

「来たな！」

武士は刀を抜きはなつと、

「悪さをするのはおぬしらか。成敗*してくれよう」

「お待ちください、お武家さま」

武士が斬りかかろうとすると、変化の頭*が進み出ました。

「われわれが夜な夜な変化となってあらわれます理由をお話します。われわれはみなさまをおどかしたいわけではないのです。この

寺に住んでおりました住職は、女房も女中も、みんな物をそまつにする人ばかりでした。洗いものをしたときに、茶わん、はし、しゃもじ、なにが流れてしまってもそのままです。われわれは長い間、どぶのなかにたまったままどこにも行けず、苦しんできたのです。そのことをお知らせしたくて、変化となってあらわれました。どうかわれわれをあわれと思って、どぶのなかからひきあげてください。そして物をそまつにしないように、村のみんなに伝えてください」

「よし、わかった」

朝になると、武士は村の人たちにこの話を伝え、どぶのなかにたまっていた茶わんやはしをひろいあげました。それからというもの、寺にあやしいものたちは出なくなったということです。

【用語の説明】

夜な夜な、変化＝＝毎晩、妖怪やおばけ

しゅみだん＝仏像(ぶつぞう)を置(お)く台座(だいざ)

成敗(せいばい)して＝やっつけて

頭(かしら)＝親分(おやぶん)

※ 大田市(おおだし)ではこの話(はなし)をもとにしてミュージカルスクールというワークショップを開催(かいさい)しました。

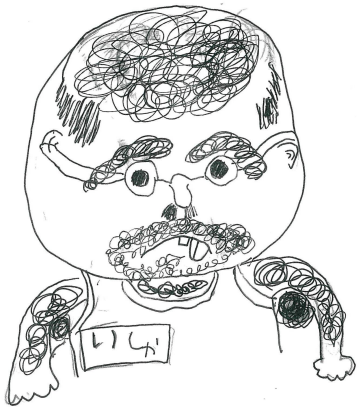
目次へ

二、けちなお医者さん

音声

おかあさんがねむたい目をこすって縫い物しながら、話してくれたお話です。

本当だかうそだかわからない話だがな、あるところにたいそうけちなお医者さんが居ったげない。



そのお医者さんはお金というものがごはんより好きでな、けれどもお金をえっと＊持っておっても、貧しい人に少しも恵んでやらなかったそうだ。そのうえ、一度も笑ったことがない。

みんなはこのけちなお医者さんを「よくばりじいさん」と呼んでおった。世間ではあまり評判が良くなかったという話だい。

雪の降る寒い寒い晩、このけちなお医者さんを呼びにきた人があったそうだ。それは人の姿に化けたきつねだった。

「子どもが病気で苦しんでいます。早く来てください、早く、早く」

きつねのおかあさんは泣きそうだったが、お医者さんは

「せっかくえしこ＊に寝ていたのに」

と、ぷんぷん怒っていた。けれどもきつねが、

「お礼はたくさんしますから」

と言うと、お医者さんは大変うれしがり、それがきつねだということも知らずに、すぐ用意して出かけたそうだ。

お医者さんはすっかりきつねに化かされておったげない。

病気の子ぎつねを見ても、これがきつねだとは思わなかった。診察をし、注射もした。そうしたら子ぎつねの熱は下がって、すやすやと寝息をたてはじめた。

「ああ、よかった。先生、ありがとうございます」

おかあさんぎつねは何度もお礼を言うと、たくさんお金をくれたげな。

お医者さんは大喜びして、暗い夜道をてくてく帰ると、そのままぐっすり寝てな。

ところが朝起きてみるとお金がない。びっくりしてあたりを見回すと、部屋中に木の葉がちらばっていて、着物にはきつねの毛がいっぱいひっついておったとや。

「ゆうべ呼びにきたのはきつねだったのか」

お医者さんはやっと気づいて、ゆうべのことを思い返した。きつねの子どもを大まじめに診察して、木の葉を大事にかかえて帰ってきたのかと思うとあほらしくなったとや。けれどもだんだんおかしくなって、けちなお医者さんは思わず笑い出したそうだ。

この話はこれでおしまい。

【用語の説明】

えっと＝たくさん 👉

えしこに＝よく 👉

※「たくさん」は大田市では「よーけ」を使うほうが多いようですが、話者の言葉を用いて「えっと」にしました。「えしこに」は「良い具合に」という意味の「えーしこうに」でしょう。

三、清水寺の仏さま

音声

銀山に清水寺というお寺があります。

このお寺にはいまでもたくさんの宝物がありますが、その中に安原備中守＊にまつわるこんな話が残っています。

安原という人は銀山で銀を掘っておりましたが、ひとつ大手柄をたてたいものだと願っていました。そこで近くの山を調べては歩き回り、本谷という山に目をつけました。

「どうもここは銀の出そうな山だな」

そんな気がしましたので一生懸命探しましたが、どうしても見つかりません。

「これはどうも、人の力ではおよばない。仏さまのお力にすがるよりほかはないだろう」

そこで安原は清水寺に行くと、仏さまにお願いをしたのでした。

「どうか、この山の銀のありかを教えてください」

けれども二日経っても、三日経っても、

銀はやっぱり見つかりません。四日経っても、五日経っても、同じことです。それでも心を動かさずに、仏さまを信じて毎日お祈りを続けました。

すると二十一日めの夜のことです。どこからか仏さまの声が聞こえてきました。

「いまこそ願いを叶えてあげよう」

驚いて顔を上げると、向こうのほうで白い光がちろちろと揺れています。急いで山へ駆けつけて、その場所を掘ってみると、驚くほど大きな銀のかたまりが出てきました。畳四枚分もあるほどです。

安原は大喜びして、銀山のお役人に申し出ました。その銀はすぐに江戸の徳川幕府へ送られたそうです。

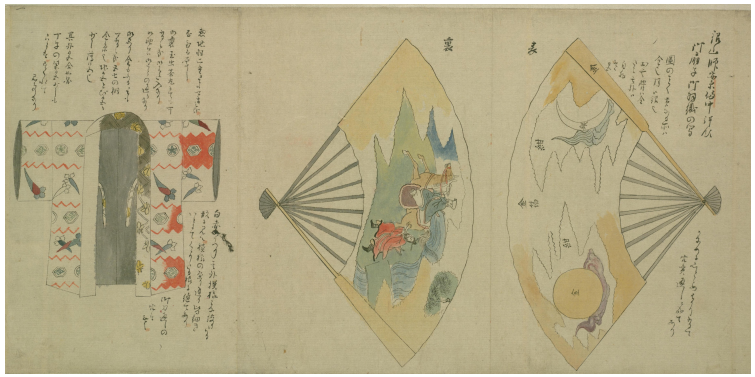
この手柄をたいそうほめられた安原は「備中守」という位をいただきました。そして役人となって栄えると、銀のありかを教えてくれた清水寺にお礼をしたということです。

安原備中守の子孫は邑智郡のほうに移って、お医者さんになったそうです。

【コラム】安原備中守とは？

安原備中守は、備中国（岡山県）出身の安原伝兵衛。「銀山旧記」によれば清水寺の観音の霊夢により釜屋間歩を開いた。年に三六〇〇貫の運上を納め、徳川家康に謁見したこともあります。

安原備中守は家康から拝領した辻が花染丁字紋道服👆と扇子を清水寺に奉納しました。道服は染色学の上で貴重な資料で、国の重要文化財に指定されています。



「石州銀山紀聞」（国立国会図書館）には、安原伝兵衛が徳川家康から拝領した辻が花染丁字紋道服と扇子の絵が描かれいます。古文書には他に銀山役人の吉岡出雲と宗岡佐渡が家康から拝領した道服も掲載されています。👆

👉 目次へ

四、焼いた柿の種から芽は出るか

音声

むかし、あるとき、おじいさんがお寺へお参りに行きました。お寺ではご法義といって、仏さまの教えをわかりやすく話してくれる説教がありまして、おじいさんは家に帰ると、おばあさんや息子を呼んでこう言いました。

「今日はありがたいことに、ご導師＊さまのご法義があってな、しっかりと信心すれば焼いた柿の種からでも芽が出るのだとおっしゃっていた。これからはたびたびお寺に参って、ありがたいご法義をいただくようにしたいものだ」

ところがおじいさんの息子は、その話を聞くとひどく怒り出しました。

「なんだって、そいつはとんだくそ坊主だ。焼いた柿の種から芽が出たりするものか。そがな嘘をつく話がありがたいなんてとんでもない。よし、明日はおれが寺へ行ってこよう。焼いた柿の種を持って行って、芽が出るところを見せてもらおうじゃないか。何も生えてこなかったらひどい目にあわせてやる」

おじいさんが何を言っても、息子は聞く耳を持ちません。あくる日になるとお寺へ出かけていきました。

お寺ではたくさんの人が集まって、ご導師さまのお説教を聞いていました。息子は「ごめん、ごめん」と人をかきわけ、ご導師さまの前に進み出ました。

「ちょっと話をやめてもらいたい。聞けば昨日焼いた柿の種から芽が出ると言ったということだが、そんなことがあるものか。さあ、ここに焼いた種を持ってきた。この種から芽を出させてみい。ただちに芽を出させてみろ。もしも出てこなかったら生かしておかんぞ。いい加減なことを言いおって、責任を取ってもらおうか」

息子があんまり大きな声でどなるので、ご導師さまは困ってしまいました。焼いた柿の種から芽が出るというのはたとえ話だったのですが、もう一度それを説明しても納得してもらえそうにありません。

「仕方がない、仏さまの教えをきちんと伝えられなかったわたしがいけなかった。責任を取れというなら、命を差し出してもやむを得まい」

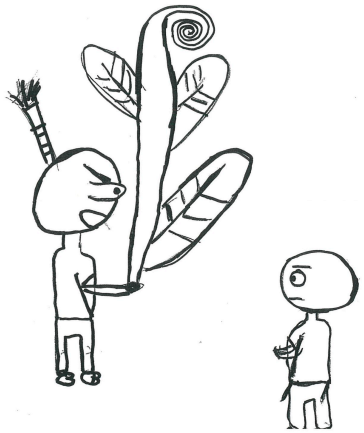
そう覚悟を決めて、ご導師さまは焼いた柿の種をじっと見つめておりました。

すると、どうでしょう。

種から芽が出ると、みるみるうちに青々と伸びていきました。

「なんということだ。これが仏さまの教えなのか。ご導師さま、失礼なことを言って申し訳ありません」

息子はすぐに謝って、それからは誰よりも熱心にご法義をいただきに行くようになりました。そうして仏さまのお弟子にまでもなったということです。



【用語の説明】

ご導師＝お寺の僧

目次へ

あとがき

島根県大田市に伝わる昔話を『大森 昔話 口碑伝説集』からとりまとめた。島根県の昔話というと県東部の出雲地方に伝わる神話が注目されがちだが、どうして西部の石見地方にも豊かな話の数々が残っている。

大森は大田市のほぼ中央に位置している。二〇〇七年世界遺産に登録された石見銀山のふもとの町だ。二〇二〇年に認定された日本遺産の構成文化財のひとつでもある。この地に伝わる昔話を記録しようと、昭和十一年十二月、大森町尋常高等小学校（現・大田市立大森小学校）の児童たちに課題が出された。家族から昔話や伝説を聞いて、書き取っていらっしゃいというものである。そして三十人から四十編もの話が集められた。なかには福田芳子さん、豊さん姉弟のように複数の話を聞き書きした児童もいた。

集まった昔話を上橋守雄先生がまとめ、それをもとに森脇太一氏が『大森 昔話 口碑伝説集』として編集された。郷土文化研究家として名高い江津市跡市の森脇氏は、休みの日ごとに大森へ通って、話者の年齢や出身地を調査し附記されている。森脇氏の地道な

ご尽力があったからこそ、手書きでガリ版刷りのこの昔話集がいまに伝わっているのだろう。

石見銀山は十七世紀を中心に栄え、大森には各地から多くの人が集まっていた。その人たちが伝えた遠い土地の昔話もあったに違いない。『炭焼き長者』は佐渡の長者の話だが、佐渡の金山で働いていた坑夫が石見銀山にやってきて、この昔話を伝えたのだろうかと想像が膨らむ。

テレビもゲームもなかった時代、昔話は数少ない娯楽のひとつだった。囲炉裏端で語られる昔話に心をときめかせ、それをほかの人に語って聞かせ、人から人へと口伝えにつむがれてきたのだ。

大田市にはいま地元に伝わる昔話や民話を伝えていこうとする動きがある。大田市文化協会は二〇一八年より会報紙きれんげに『ふるさとの民話』を連載、ほかにも日本海沿いの五十猛や南東部の三瓶山の町で、昔話や神話の絵本が出版されている。

今回、大森小学校の児童たちがさし絵を描いてくれた。八十年余り前、同じ小学校に通っていた児童たちが集めた昔話に、三世代くらい下の子どもたちがさし絵を描く。昔話を通じた共同作業が実現したことが喜ばしい。

昔話を集めた上橋先生が書いておられるように、その土地に伝わる話は「民衆全体の共同創作であり、魂の故郷」である。語り継がれてきた昔話を知ることは「郷土の立体的理解」につながる。あちらこちらに分散してしまっている手書きの昔話集を集め、保存し、次の世代へ伝えていきたい。

末筆ながら、今回の収録をご快諾くださった森脇太一氏、そして福田芳子さん、豊さん姉弟のご家族に心よりお礼を申し上げます。

できる限り原文を尊重しましたが、いまの子どもたちにも読みやすいよう、一部文章に手を加えましたことをお断りします。

上橋守雄先生をはじめ、昭和十一年度に大森小学校に在籍されていた児童のご消息をご存じの方がいらしたら、ご一報いただければ幸いです。

佐藤　万里

〈プロフィール〉

舞台作品やテレビドラマの脚本・作詞、小説の執筆などを手掛けられています。主な作品に『二都物語』（帝国劇場）、『世に

も奇妙な物語『（ＣＸ）など。大田市とは第６回島根音楽祭『学校ネズミのコンサート』をきっかけに交流を続けられています。小説『ようこそカズ先生』（ＴＯ文庫）ではミュージカルに挑戦する大田市民の姿や石見銀山を描かれています。

大森町を訪ねて

島根県大田市大森町は、世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」の中心地です。町内には間歩と呼ばれる鉱石の採掘跡や製錬所跡、歴史的な建物が建ち並ぶ町並みなどがあります。この動画では大森町にある遺跡を通じてその魅力を紹介しています。

動画 👈 クリック

👉 目次へ

大田市ふるさと教育教材

大田～お話つむぎ・大森町編

令和三年三月三十一日

監修　佐藤　万里

編集　特定非営利活動法人石見銀山資料館

発行　大田市教育委員会

〒六九四－〇〇六四　島根県大田市大田町大田ロ一一一一番地

電話　〇八五四－八二－一六〇〇